釧路市立北中学校「学校だより」

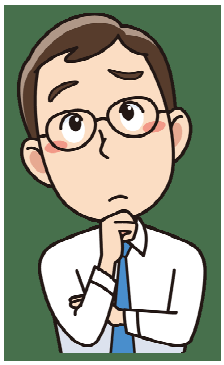
北　魂

令和７年（2025年）10月６日発行　VOL 27

校長の問題意識

釧路市立北中学校長　冨　田　直　樹

４日（土）の釧路新聞に「中学校数学をサポート　釧路市教委　初のオンライン学習会」という見出しの記事が掲載されていました。記事には「釧路市教育委員会（岡部義孝教育長）は３日、市立中学校の生徒を対象にした放課後学習サポート事業『中学校数学放課後オンライン学習会』を初めて開き、市立の15校から約140人が参加。市教委の赤本純基指導主事が、オンライン学習を支援した」と記されていました。本校でも20名の生徒が本学習会に参加していて、３日（金）の放課後（16時30分～17時）、３階の空き教室で１回目のオンライン学習会が行われました。赤本指導主事が一方的に指導するだけではなく、生徒が主体的に取り組めるよう、他校の生徒と音声をつなぎ、負の数がある場合や分数の計算などの問題に一緒に向き合ってくれました。学習会を終えた生徒に感想を聞いてみました。「とても分かりやすかったです」、「自分の考え方が正しかったことが分かり自信になりました」、「ちょっと見方を変えるだけで問題の難易度が下がることに気が付きました」など、本学習会の成果を教えてくれました。本学習会は12月まで、全８回実施されます。中学校１・２学年の学習内容ですが、３学年の生徒の参加も可能で受検に向けた学習としても活用できます。ここまで丁寧に生徒の学習支援をしてくれる教育委員会は他に聞いたことがありません。いつもながら釧路市教委の職員の皆さんに感謝です。



ただし、学校として、校長として、「市教委の皆さん、いつもありがとうございます」、「赤本指導主事、お世話になります」で終わらせてはいけないのではないかと思います。市教委（指導主事）の業務は、「学校の教育活動の適正な運営を促進するため、校長や教員に対し、教育課程、学習指導、生徒指導、教材、学校組織編制など専門的な事項について、指導・助言を行うこと」です。生徒の学力（学び）の保障は学校（校長）の最上位目標です。学校はこの目標を実現するために、授業をはじめとする各種教育活動を行います。その結果（取組の過程も含む）を踏まえて、市教委（指導主事）が校長等に指導・助言する。これが本来の市教委（指導主事）と学校の関係です。つまり、学校（私たち校長）は、市教委（指導主事）に過重の負担をかけてしまっているということです。

アメリカのマサチューセッツ州の州都であるボストンの学校の校長は、教育の効果をデータで分析し、継続的に改革を進めることが求められているそうです。テストの点数だけではなく、不登校率やドロップアウト率など、様々な点からつくられる「学校のアカウンタビリティスコア」が重視されていて、毎年、100点満点で多様な指標から測定され、10点以下が数年続くと校長や教員は解雇されることもあるそうです。

北海道にも釧路市にも、ボストンの学校のようなシステムはありません。だからよいのではなく、学校経営における学びの保障の位置付けはどうだったのか、授業改善に真摯に取り組む教員に対して校長としてどれほどの指導・支援ができていたのか、見直してみる必要があります。今回の放課後オンライン学習会は、校長の学校経営に対する問題意識が問われているのだと思います。